



劇団は続くよどこまでも



公演の千秋楽で拍手を受ける劇団フロンティアの団員たち

拍手は鳴りやまなかった。11月、黒部市を拠点にするアマチュア劇団「劇団フロンティア」の第110回公演は千秋楽を迎えていた。田んぼの中にぽつんとある山小屋風の劇場には、63人の観客が詰めかけた。

公演のタイトルは『お湯は続くよどこまでも～宇奈月木管事件』。昭和初期の宇奈月温泉を舞台にしたオリジナル作品だ。湯を引く木管が通る土地の所有者が、土地の買い取りなどを求めた民事裁判を題材にした。温泉の存続が危ぶまれる中で、地元の食堂に集まつた住民や駅員らが裁判の影響に振り回される様子をコミカルに描いた。

方言の入ったせりふがテンポよく飛び交い、勘違いがちょっとした騒動を巻き起こしていく展開に、会場からは笑いが起きる。登場人物たちの家族や地域への思いが明らかになっていき、最後は判決が確定したことが分かって物語は大団圓を迎えた。

カーテンコールが終わり、出演者は観客を見送るため、舞台袖から出口に向かう。だが、客席では拍手が続く。出演者たちは慌ててステージに戻り、2回目のカーテンコール。称賛の拍手の中、今回が初舞台の女性団員は涙を拭った。

劇団の代表、森 隆俊さん(72)=黒部市=は入団して50年余りになるが、2度目のカーテンコールは経験がない。一般公演の全5日間が札止めになったのも初めてだ。「地元に根差した題材に、親近感を持ってもらえたのかもしれない」

◇

劇団フロンティアは1968(昭和43)年、演劇愛好家たちで結成した「黒部演研フロンティア」が始まりだ。

森さんが入団したのは、結成4年目。魚津工業高校の演劇部を立ち上げたメンバーで、地元のメーカーで働きながら青年団の演劇の競技会に出演。それがフロンティアの団員の目に留まり、入団した。

当時の代表、亀谷政春さんは自分だけではなく、若手にも演出を任せた。団員がそれぞれ公演したい作品を挙げ、決まればみんなで作り上げる。旗揚げ公演の『女の一生』のような名作も上演すれば、アングラ作品やミュージカルにも取り組む。自由な気風が、演劇のジャンルの幅を広げていった。

結成から6年がたった頃、文学座出身の竹内タクオさんが故郷の入善町に戻っていることが分かり、演出を依頼した。

竹内さんは難しい能書きは語らない。作品のメッセージを伝える手段は自由でいいという考え方で、役者の創造性に任せて自由に演じさせる。作品の流れに沿っていれば、台本にないせりふもOK。良いと思えば、「それでいいこう！」と演出を決めていく。

その手法は、団員たちにとって衝撃的だった。「プロの芝居をコピーするような気風を根本からひっくり返された」と森さんは言う。「表現に正解はなく、解釈によってどんな表現でも伝えられるという面白さを初めて知った」

竹内さんは団員たちに告げていなかったが、白血病を患っていた。体がふらふらになりながら演出を続け、練習が終われば団員を飲みに誘った。

公演が終わって約1週間後、竹内さんは帰らぬ人となった。団員たちとわずか3カ

ながら、団員たちは自らの手で建設工事を始めた。休日返上でこつこつと作業に当たり、2年後に劇場「シアターフロンティア」が完成。夢物語を現実にした。

劇場を持つメリットは、本番と同じセットで練習ができる、会場にセットを搬入しなくていい点だ。練習も夜遅くまでできる。

大がかりな仕掛けも可能になった。ワイヤで役者を宙づりにする演出や、円形の舞台を回転させて場面転換する芝居なども行った。

一方、田んぼの中に突如できた建物は、周囲の住民には、いぶかしく見られていた。劇団に「反政府運動」というイメージを持ち、公演に反対する人もいた。

だが、劇団の活動が知られるようになるにつれ、印象は逆転する。若い世代が減っていく地域に、若者を呼び込むことが評価

ており、立命館大では勇気を出して学生劇団に入った。そこで演技を経験し、作・演出を1作品手掛けた。周りにはプロの舞台俳優になる学生もいたが、尾崎さんはUターンして就職した。

働き始めてすぐにフロンティアから声がかかり、入団した。尾崎さんは学生時代に演技のテクニックを重視していたが、フロンティアの先輩たちは役者の心の動きを表現することに重きを置いていた。

反発する気持ちはあったが、考えが変わっていく。「テクニックだけで表現できるのはごくまれな天才だけ。気持ちの流れが大事なことをフロンティアで教わった」

尾崎さんは、役者をしながら、自発的に書いたオリジナルの脚本『センチメンタル朝間野球』を提案。劇場開設20周年の記念公演に採用された。以後、オリジナル作品を手掛けるようになる。

◇

2023年、宇奈月温泉開湯100周年に合わせ、フロンティアは宇奈月温泉の礎を築いた土木技師、山田 伸(やまだひろのぶ)を取り上げたオリジナル作品を上演した。公演は好評で、観客のアンケートには「木管事件もやってほしい」という声があった。

フロンティアの観客は7割が固定客で、そのほとんどが地元住民だ。森さんたちは「半世紀以上も地元の人に支えられてきた自分たちがお返しをする時」と考え、再び地元を題材にした公演をすることを決めた。

脚本を担当する尾崎さんはストーリーを練るうちに、だんだんテーマが見えてきた。先人たちの功績、地域に対する責務、人を元気にする役割、そして後世につなぐ大切さ。宇奈月温泉を題材にしているものの、作品のメッセージはフロンティアにも通じている気がした。110回の節目となる公演は、自分たちのことも投影する物語に仕上がった。尾崎さんは「意図したわけではなかったんですが、結果的にそんな感じになりました」と照れたように言う。

来年の次回作は未定だが、地元の別の題材を取り上げてほしいという声もあるという。劇団の活動は続いている。

劇団フロンティアは創立57年。節目となった第110回公演には、劇団で長年培われてきたものが織り込まれていた気がします。『虹』も今回が200回の節目です。続けること、つなげることの重みに思いを巡らせました。



「山の呼吸」
広田 郁世

月ほどの付き合いだったが、「濃厚な時間だった」と森さんは振り返る。「自分の死期を感じながらも、一つの作品を全うする生き様を見せてくれた。竹内さんが与えてくれた影響は大きかった」

◇

フロンティアの大きな特徴は、アマチュア劇団では珍しい自前の劇場を持っていることだ。

きっかけは飲みの席だったという。85(昭和60)年頃、酔った団員たちが「自分たちの劇場を持って、定期的な公演がしたい」という話をしていた。すると、美術担当の稻澤 廣明さんが「うちの田んぼを貸すから、みんなで使おう」と敷地を無償で貸し出すと申し出た。

団員たちはすぐに動き出す。銀行から融資を受け、材料を購入。プロの協力を受け

されるようになった。稻澤さんは「ほっとしましたよ。認められるには10年かかった」と振り返る。

◇

現在、フロンティアの団員は会社員や主婦ら20人余り。仕事や家事を終えた夜に劇場に集まり、練習に励んでいる。

『お湯は続くよどこまでも』の作・演出を担当した尾崎 俊太郎さん(50)は黒部市の職員だ。初めてフロンティアの舞台を見たのは、通っていた中学校の体育館改修を記念した出前公演だった。もともと演劇に興味があり、「こういうところに入りたい」と思った。

進学した魚津高校に演劇部はあったが、入らなかった。「演劇はキラキラした人たちがやるもの」と考えていたからだ。一方で、大学では演劇をしたいとひそかに思っ



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

0766-25-7773

niji@kitanippon.jp

次回掲載は1月1日(木)です。

紙面提供／人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局